

11 年間の経年調査にみる色の好みとパーソナリティとの関係 — トーンと彩度の嗜好傾向について —

Studies on Color Preference and Personality in Aging Research for 11 Years -Relationship between Personality and Color Preference in Tone and Chroma-

松田 博子 Hiroko Matsuda カラーコンサルタントスタジオ Color Consultant Studio
名取 和幸 Kazuyuki Natori 日本色彩研究所 Japan Color Research Institute
破田野 智美 Tomomi Hatano 立命館大学 Ritsumeikan University

キーワード：色彩嗜好，性格，トーン，彩度，パーソナリティテスト，大学生

Keywords: color preference, personality, tone, chroma, personality inventory, university student

1. はじめに

本調査は色の好みと性格特性との関係を検討する研究の一環として，大学生の好きなトーンまたは彩度と，矢田部ギルフォード性格テストの粗点との関係を分析したものである。我々は，色彩嗜好に影響する「環境的要因（居住地域・調査を実施する季節）」「個体的要因（職業・年齢）」「調査に関する要因（調査場所・照明）」をできるだけ統制し，かつ「流行による影響」を相殺するために 5 年にわたり調査を実施し，その結果を 2007 年に発表した。そこで色の好みと性格特性との間に，ある程度関係性が確認された。その後，同様の調査をさらに 6 年間継続して実施した。本調査はそれらを合わせた 11 年分の調査データから，色の好みと性格特性との関係について検討したものである。これだけの期間，継続して行なわれた性格特性と色彩嗜好の先行研究はみられない。なお，今回は色の好みの側面としてトーンの種類と彩度のレベルについて取り上げた。

また，近年パーソナリティ研究で広く認知されている Big Five という考え方で採用されている 5 因子と YG テストとの関係についての先行研究を参考にし，YG テストで得られた性格特性と色の好みと Big Five との関わり合いの分析も試みた。

2. 方法

2.1. 調査対象者

京都または大阪近郊在住の大学生 2023 名を対象とした。男性 928 名，女性 1095 名から成り，年齢は 18 歳から 23 歳，平均 19.5 歳だった。

2.2. 実施時期

調査は 2001～2011 年 6 月 7～20 日に実施した。

2.3. 調査場所

調査は対象者の在学する京都または大阪の大学の講義室で行った。机上上面照度は 650 ルクス以上であった。

2.4. 提示チャート（トーンテスト用）

①黒板貼り付け型（2001～2009 年施行）：N6 のグレイ（40×168cm の画用紙）を背景にして，日本色研配色カード 175b（17.5×6.0cm）を添付し，トーンの異なる 9 つの扇形のグラデーションを作成した。b・v・dp・lt・d・dk・p・ltg・g トーンの偶数の色相番号を 12 色，色相番号順に配列した。

②チャート型（2010～2011 年施行）：A4 サイズの明度 N7.8 のグレイを背景に，①と同じマンセル値の色票を扇形に配置した。

2.5. 提示チャート（彩度テスト用）

①黒板貼り付け型（2001～2009 年施行）：N6 のグレイ（画用紙 40×55cm）を背景にして日本色研標準カード 230（2.9×7.5cm）を添付し，3 つの彩度の違うグループを作成した。色相は 4R・4YR・5Y・3GY・3G・3PB・7P であり，7 色を順に縦に配列した。それぞれの色相から A 低彩度（C（クロマ）=1.0～2.0），B 中彩度（C=5.0～6.5），C 高彩度（C=10.0～12.0）に分けて配列した。各色相の明度差は 1.5 以内であり，中明度色（V=4.0～7.5）のみを用いている。

②チャート型（2010～2011 年施行）：A4 サイズの明度 N7.8 のグレイを背景に作成した。色票彩度は①と同じマンセル値とした。

2.6. 性格テスト

矢田部ギルフォード性格テスト（YG 性格検査）の一般用を用いた。

2.7. 手続き

トーンテストでは，好きなトーンのグループを 1 つ，彩度テストでは好きな彩度の色グループを 1 つ選択させた。YG 性格検査は，強制速度法，集団試行法で行った。

3. 結果

好まれるトーンや彩度の程度により，回答者の YG 性格検査の各尺度の粗点に差がみられた。これを確認するため，選択（選択者・非選択者）×性別（男・女）の 2 要因の分散分析を行い，結果を表 1 と表 2 に示した。

3.1 トーン嗜好と性格との関係（表 1）

v トーンを好む人には，非抑うつ性・非劣等感・

表1. トーン嗜好と性格特性

	トーン								
	低彩度			中彩度			高彩度		
	g	ltg	p	dk	d	lt	dp	b	v
全体	<i>G</i>	<i>R</i>	<i>AgRS</i>	<i>CoA</i>	<i>T</i>	<i>lTA</i>	<i>RTS</i>	<i>IS</i>	<i>DIN Ag GRIA</i>
男性 選択者数	(<i>D</i>) 5	<i>AS</i> 8	 50	(<i>Co Ag</i>) 35	(<i>Ag</i>) 30	 173	(<i>S</i>) 66	(<i>O</i>) 265	(<i>D GRI</i>) 296
女性 選択者数	 6	(<i>R</i>) 13	(<i>RS</i>) 121	 18	<i>GR</i> (<i>TS</i>) 24	(<i>A</i>) 378	(<i>Co T</i>) 72	(<i>GRI S</i>) 314	(<i>IN Ag R AS</i>) 149

表2. 彩度嗜好と性格特性

	彩度		
	低彩度	中彩度	高彩度
全体	<i>D GRT</i>	<i>NR TAS</i>	<i>DNGRIS</i>
男性 選択者数	(<i>T</i>) 83	 144	(<i>I</i>) 703
女性 選択者数	(<i>D GR</i>) 144	<i>NR</i> (<i>TA</i>) 198	<i>NR S</i> (<i>G I</i>) 751

D:抑うつ性, C:気分の変化, I:劣等感, N:神経質, O:客観性欠如, Co:協調性欠如, Ag:攻撃的, G:一般活動的, R:のんきさ(衝動的・気軽), T:思考的外向, A:支配性, S:社会的内向

*非選択者に比して選択者の得点が有意に高い尺度名を太字(下線)で, 低い尺度名を斜体で示した ($p < .05$)

*男性・女性の欄は, 性別×選択の交互作用が認められ, かつ選択の単純主効果が認められた尺度を示した ($p < .05$)

*性別の単純主効果のみが認められた尺度名はカッコ内に示した ($p < .05$)

非神経質, 攻撃的・支配的・活動的・衝動的・思考的外向・社会的内向の傾向が認められた。b トーンを好む人は思考的外向・社会的内向であり, 特に女性は活動的かつ衝動的であることが認められた。dp トーンは, 非衝動的・思考的内向・社会的内向の人に好まれた。lt トーンは劣等感があり, 思考的内向で服従的な人が好んだ。d トーンは思考的内向の人に好まれ, 男性には攻撃性, 女性には非活動的・非衝動的・思考的内向の傾向が認められた。dk トーンは, 非協調的で支配的な人に好まれ, 男性には攻撃的な特性も認められた。p トーンは非攻撃的・社会的内向・非衝動的な人が好んだ。ltg トーンを好む人は非衝動的であり, 特に男性は服従的で社会的内向であった。g トーンを好む人は非活動的であり, 男性には抑うつ傾向が認められた。

3.2 彩度嗜好と性格との関係 (表2)

高彩度を好む人は抑うつ性・神経質傾向が低く, 活動的・衝動的・思考的外向・社会的外向の傾向が認められた。中彩度を好む人は, 神経質で, 服従的・非衝動的・思考的内向・社会的内向であった。低彩度を好む人は, 抑うつ性が高く, 非活動的・思考的内向・非衝動的であった。

4. 考察

5年間の調査結果(2007)では, 男性の色の好

み(トーンと彩度)と性格特性との関連は女性の場合ほど顕著ではないと報告した。しかし年数と人数を増やしたことにより, 男女ともトーンや彩度の嗜好によって性格特性に違いが認められた。鮮やかで明るいbやvトーンは, 思考的外向の男女に好まれ, 落ち着いたdpトーンや, 優しいltトーン, 穏やかなdトーンは, 思考的内向の男女に好まれた。淡いpトーンや, 明るい灰みのltgトーン, 濃いdpトーンは非衝動的な男女に, 鮮やかなvトーンや暗いdkトーンは支配的な男女に好まれた。対照的に, 服従的な人は, 優しいイメージのltトーンを好んだ。活動的な人は鮮やかなvトーンを好んだが, 非活動的な人は地味な灰みのgトーンを好んだ。男女共に, トーンの持つイメージとそれを好む人の性格が示す印象とが似ているように思われる。

彩度だけの嗜好に関しては, 男女とも高彩度を好む人は, vトーンを好む人とよく似た傾向がみられ, 非神経質・非抑うつ性・外向の傾向が認められた。これに対し中彩度・低彩度は, 神経質・抑うつ性・内向的な人に好まれ, 高彩度を好んだ人と対照的であった。なお気分の変化を表すC尺度には, トーンや彩度の嗜好による差が認められなかった。

また近年個人のパーソナリティ研究においては, 性格を5つの因子によってとらえるBig Fiveの考え方が一般的になりつつある。山本ら(2010)は, 「YG性格検査はBig Fiveの情動性(N)と外向性(E)をより詳細に測定する尺度といえる」と結論づけており, これに即して述べれば, 本調査の結果は, 色彩嗜好(トーンと彩度)が情動性(N)と外向性(E)に関係しているといえるであろう。特に彩度の高い色は情緒が安定した, 外向的な人が好み, 中彩度と低彩度は神経質で内向的な人が好む傾向がある。またトーンの低彩度は, 情動性には関係がなく, 内向性の人が好むことも示唆された。

参考文献

- 松田博子・名取和幸・伊坂裕子・仲谷洋平「色の好みとパーソナリティについての研究 その6 色彩嗜好と性格特性」(2007)日本色彩学会誌 vol.31 p106-107.
山本理恵・清水和秋(2010)Big FiveとYG性格検査の関係性の探索—Big Five 形容詞短縮版とYGのジョイント因子分析から—日本心理学会第74回大会発表論文集, p61.